聞き出す事が大切ではないかと思う。

×　　×

パウロの福音理解には発展がある。彼は自分が受けた福音の内容を次のように語る。

最も大切な事としてあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと。

―コリントの信徒への手紙二章三節以下―

これはパウロが回心した当時すでにエルサレムの原始教団で成立していた「キリスト教宣教の定式」だったと言われているものであり、パウロはそれを「わたしも受けた」と言う。

その内容は所謂、律法違反が罪であるという神との契約を前提にした極めてユダヤ的な教えに基づいたものである。すなわち、神はそのひとり子イエスに民の罪を全部背負わせ十字架上で殺すことによって、民は罪あるままで神の前で「罪がないもの」と宣告されることで、神はご自身の義を貫徹された。その意味でイエスは、民の罪を贖ってくださった救い主(キリスト)となる。そして、その構図は「罪」と「贖罪」と「義認」ということになるのだが、パウロが受けた福音

の内容をよく見ると、その中心は「神の義」ということにある。

×　　×

イエスの十字架の死の直後に於いては、イエスの死の意味が弟子達には明確ではなかったと思われる。それ故、その理由を知るための苦悩が弟子たちの内にあったのではないか。だが、次第に明らかになって来たことが所謂「ユダヤ的贖罪」という事である。彼らは民全体の罪を贖う祭儀としての業を、モーセを通して神と契約を交わした律法規定に基づき遵守してきた。例えば旧約聖書レビ記の冒頭に次のように捧げ物について記されてある。

神は臨在の幕屋から、モーセを呼んで仰せになった。イスラエルの人々に告げてこう言いなさい。……牛を捧げ物とする場合は……手を捧げ物とする牛の頭に置くとき、それは、その人の罪を贖う儀式を行うものとして受け入れられる。

―旧約聖書レビ記一章一節以下―

つまり彼らは神の定めに従い「燔祭（はんさい）」の宗教的儀式を日常的に行う「律法主義的生活」をしていた。それは「神の義」に応え従うためであった。

このようなユダヤ教の神殿体制を中心にした贖罪信仰という伝統的な宗教行事のもとで生活し

て来た弟子たちは、イエスの十字架での死を民の律法違反の罪の贖いの死と受けとり、民の律法主義的生からの開放のための神ご自身の義の貫徹だったのだと理解したのは当然の帰結であったと思われる。そこで、先のパウロが原始教団から受けたという「キリスト教宣教の定式」と言われる内容を今一度注目してみると、イエスの出来事は「聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと」、つまり、旧約聖書が預言していた救いがイエス・キリストの出来事として成就したのであり、それは「律法違反の罪」を贖うために死なれた。そしてその具体的な様子は、死なれた後「葬られ」、旧約聖書に書いてあるとおり「三日目に復活した」というのである。したがってその構図は「罪」「贖罪」「義認」ということであるが、中心は神の義の貫徹だということ、さらにその内容は、人間に律法を与え、守るべきことを契約として示したが、人間は律法に違反したので、その罪の故に神はご自分の義を貫徹するために当然のこととして人間を罰することになる。そこで神御自身がイエス・キリストの死を贖いとして立て人間の罪を赦すことで、神と人との契約を充たし、神御自身の義を貫徹され、イエスを死から復活させられた。そのイエス・キリストの十字架の血によって、神は人間と新しい救いの契約(新約)の印となされたというのである。

以上のとおりパウロが原始教団より「受けた」福音の内容はどこまでも、律法違反をした民の罪(神の怒り)からの贖いとしての神の義の貫徹であるということである。その構図は律法の充足

であり、結局「律法遵守・契約履行百点主義福音」だという意味でそれは極めて「法的」であると言える。

×　　×

しかし、先にパウロの福音理解には発展があると言ったが、たしかにパウロが原始教団から「受けた」それと、次のようにパウロが語る福音の内容には微妙な、しかし根本的なところでの再解釈があることに気付く。

ところが今や、律法とは関係なく、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられた神の義です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。このように神は忍耐してこられたが、今の時に義を示されたのは、御自身が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義とするためです。……わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。

―ローマの信徒への手紙三章二一節以下―

一見、パウロが「受けた」福音の内容と同じであるように思われる。たしかに、その内容は「罪」と「贖罪」と「義認」という構図には変わりがない。だが、福音のとらえ方が「法的」から「恩恵」に変化していることを、聖書の批判的文献学を導入する研究者の中に指摘する人がいるが、パウロの書簡全体から見るとき、たしかにそのパウロ理解に納得できるものがあるように、わたしなりに思っている。

先の語りの冒頭で、パウロは「ところが今や、律法とは関係なく……神の義が示された」と言う。さらに「恵みにより無償で義とされた」とも言う。そしてそれは「イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です」と言い、最後に「わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰にあると考えるからです」と結んでいる。

つまり、ここでパウロが言うイエス・キリストによる贖罪死は神の一方的な無償の恵みであり恩恵だという。そしてそれに対して人はただ信仰だけでお受けすることで、そのまま福音にあずかるのだという。つまり人の「罪」からの救済は律法を充たすため、という法的なイエス・キリストによる「贖罪」の行為ではなく、ただ神の徹底して完全な「恵み」であり「恩恵」の賜物だというのである。つまり、神との契約としての律法を人が充たす、という法的な要素はそこには無いのだという。また、その神の恩恵の賜物としての救済に人は、ただ信仰によるだけで十分だ

というのである。だからパウロは、「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です」と言う。これがパウロの信仰理解の中心である「信仰義認」である。かれはそのことの正統性を、信仰の父と呼ばれる旧約聖書のアブラハムを紹介して次のように語る。

もし、アブラハムが行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません。聖書(旧約)には何と書いてありますか。「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」とあります。……「アブラハムの信仰が義と認められた」のです。どのようにしてそう認められたのでしょうか。割礼を受けてから(律法を遵守してから)ですか。それとも、割礼を受ける前ですか。割礼を受けてからではなく、割礼を受ける前(律法以前)のことです。アブラハムは、割礼を受ける前に信仰によって義とされた証(あかし)として、割礼の印をうけたのです。

—ローマの信徒への手紙四章三節以下—

× ×

パウロが「受けた」「罪」と「贖罪」と「義認」という構図におけるそれらはすべて「法的」であり律法主義を前提にした概念である。しかしパウロが頂いた福音は「ただキリスト・イエス

による贖いの業を通して恵みにより無償で義とされ、神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を贖う供え物となさ」ったのである。したがって贖罪も義認も律法的概念の範囲を越えて恩恵という愛の概念になっている。愛は法的なこととは全く関係がない。だからこそパウロは「今や、律法とは関係なく(離れて)」と言うのだ。

と考えてくると、結局パウロの信仰理解、福音理解に出てくる矛盾は、律法主義的理解に基づく贖罪と義認の言い表しを離れないままで、神がイエス・キリストを立ててなされた一方的な無償の(律法とは関係ない)恩恵と義認とをそのまま重ねるような言い表しをしたところにあるのではないだろうか。その意味で、「法的」なものと「恩恵的」なものとは厳密に分けねばならないと思うし、パウロの信仰を理解する時、その点をしっかり押さえておくことが大切ではないだろうか。

では、パウロは何故、「受けた」福音を発展的に再解釈したのか。それはパウロの福音理解の内に必然性があったように思う。

パウロが頂いた福音は「律法とは関係なく」「ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して恵みにより無償で義とされる」ものであり、それは「イエス・キリストを信じることにより、信じるすべてに与えられる神の義」であった。ということは、パウロは「贖罪と信仰義認」を徹底

することで、無条件で神に生かされている自分に気づいたのである。つまり、パウロはその福音理解を徹底することによって「贖罪と信仰義認」を突き抜け、その向こう側に出てしまい、突き抜けて出た「場」を彼は次のように言った。

わたしにとって、生きることはキリストである。

―フィリピの信徒への手紙一章二一節―

パウロの言う「キリスト」とは、歴史的な存在としてのイエスではなく、十字架にかかり葬られ復活されたイエスに於いて証(あか)された復活の命(キリスト)それ自体なのである。とするなら、パウロが贖罪と信仰義認によって開眼し、且つ、立った現場は、「わたしの生それ自体が神の命その事」という直接経験の現場なのである。

× ×

このようにパウロが開眼し、且つ、立った自分の現場について彼は幾つかの語り方をするが、次の語りもその一つである。

私は神に生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしは、キリストと共

に十字架につけられています。生きているのはもはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。わたしは神の恵みを無にしません。

―ガラテヤの信徒への手紙二章二〇節以下―

又、次のようにも言う。

このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされた(死んだ)のです。

―ガラテヤの信徒への手紙六章一四節以下―

さらに彼は次のようにも言う。

キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。これらはすべて神から出たことであって……。

—コリントの信徒への手紙五章一七節—

では、これらのことについて何と言ったらよいのだろうか。もし神がわたしたちの味方ならば、誰がわたしたちに敵対できますか。わたしたちすべてのために、その御子をさえ渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありましょうか。誰が神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。……私は確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高いところにいるものも、低いところにいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことは出来ないのです。

—ローマの信徒への手紙八章三一節以下—

死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。死のとげは罪であり、罪の力は律法です。わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。

—コリントの信徒への手紙Ⅰ一五章五五節以下—

× ×

結局、パウロは何に開眼したのだろうか。彼の語り方はさまざまだが、語りたいことは只一つである。それは、イエス・キリストによって恩恵として得た贖罪と信仰義認を徹底することをとおして、自分の配慮と努力が自分を支えるのだと思い込んでいた世俗的な自我(律法主義的自我)が崩壊したとき、自我(自分)の底で無条件に自分を支え荷なっている本当の命(キリスト)に直接開眼した。その自分の生を「生きているのはもはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」それ故に「死も、命も、天使も、現在ものものも、未来のものも、その他どのようなものもわたしたちを引き離すことは出来ない」なぜなら、「わたしにとって生きることはキリスト(大いなる命)である」のだから。

×　　×

パウロはイエス・キリストが十字架にかかり人間の罪を贖ってくださったから、人間の罪は赦されたのだ、というような「法的」「合理的」「教義的」な事を「信ずる」ことで得ようとする救いの保証や安心は説かない。それは世俗的自我(律法主義的自我)の産物である。彼は、イエスの十字架の死を贖罪や信仰義認として教義的に理解する以前に、その出来事の中に神の恩恵(愛)を直接経験することで、一挙に自己の命の真底に開眼させられたのだ。その間の経緯を「聖霊によらなければ、だれでも『イエスは主である』とは言えないのです。」と言った。パウロの場合の「聖霊」とは復活したキリストの霊であり、神の霊でもある。(ローマ人への手紙八章九節以

下)

×　　×

パウロはイエスが十字架にかかったから人間の罪は赦された。とか、それは旧約聖書に預言されていたから真実である。とか、聖書にそのように書いてあるからそれは真実なのだ。というような、何かの権威に寄り掛かり、また、自分でそう信じているからという主観的な確信や妄信によって自分の宗教的実存を保証したのではない。彼はそのような〝原理主義的熱心〟を律法主義的ユダヤ教徒の信仰に潜んでいることを鋭く洞察して、次のように語る。

わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証しますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです。

―ローマの信徒への手紙一〇章一節以下―

「神の義」を知るとは、聖書の文字を読み、そこから帰納(一つ一つの具体的な事実から、共通点を求め、一般的な法則を導き出す方法)や推論(既に知っていることをもとにして知らないことを推しはかる)して、知り得た神の知識ではない。また、先にも言ったが、聖書に書いてある

その文字を客観的な知識や権威とすることでもない。勿論信念という妄信的な信仰のことでもない。「神の義」とは、神の深い命に秘められている神の救いの御意志そのものであると言える。したがって、その神の義を「知る」とはまさに聖霊の働きによって自分自身の生きている事が刻々神の命に支えられているその命の事実を直接経験することによって悟る事(開眼すること)にほかならない。まさにパウロは贖罪と信仰義認というユダヤ的な信仰理解でイエスの死と復活を受け取ることによって、その事柄が証しする命そのものをユダヤ的な形を越え、さらに深く聖霊によって直接経験したのである。

×　　×

以上のパウロの信仰を再び整理して見ると、パウロは贖罪と義認信仰を徹底することによって、律法主義的自我(世俗的自我)に死に、自我を越えた神の大いなる命(キリスト)に生かされている人間の本来性(本当の自己)に開眼したといえよう。その事の言い表しが「わたしは、キリストと共に十字架につけられ(世俗的自我は死に)ています。生きているのはもはやわたし(世俗的自我、律法主義的自我)ではありません。キリスト(神の大いなる命としての真実の自己)がわたしの内に生きておられるのです」ということであり、その集約的な言い表しが「わたしにとって、生きているのはキリストです」ということなのである。その意味で、イエスの十字架の死と復活に贖罪と義認を発見する信仰は、神の大いなる命(キリスト)こそが、人間を本来性へと創りあげてい

く自己の存在の本当の根拠なのだということを開眼せしめる有り難き「方便」だったといえるだろう。ここで言う「方便」とは、存在の根底なる神の大いなる命(キリスト)に近づけ、到達させ、開眼させる知恵、または道という意味で用いた。

×　　×

新約聖書に於いてイエスが提示し、また、使徒達やパウロが、イエス・キリストの出来事をとおし聖霊によって開眼させられたことは何だったのか。それについてはそれぞれの立場からの解釈や見解があるだろう。しかし、つまるところは、「人間を本来的に生かす働きとは何か」ということの証示である、と言える。

人間を本来的に生かす働きとは、人間を本当に人間として自立させる働きのことである。人は対社会関係で思い煩い、対人間関係でさまざまな悩みをもち、さらに自分自身との関係、例えば自分の生と死についての配慮と不安に生きている。そのような思い煩いから解放され、それらを克服して自己を確立して生きることが、人間として自立するということなのである。そしてそのような生き方、在り方が人間の本来的な生なのである。このように人間を本来的に生かす働きとは何か、ということを証言し、そのような生へ人間を自覚開眼させる働きをするのが新約聖書である。イエスはマルタに次のよう言われた。

あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリヤは良い方を選んだ。それを取りさってはならない。

—ルカによる福音書一〇章四十一節以下—

×　　×

イエスが提示する「必要な一つ」とは「神の支配」への開眼である。私たちがそれについて知ろうと知るまいと一切関係なく、すでに有りつづける「神ともにいます」という原事実、神の「命のたぎり」その事が、人間を含めた全存在の命の場なのである。それは、人がある特定の宗教に立つことによって初めて生じる事ではなく、その人間の宗教信仰以前、一切の主義主張以前、いかなる価値意識、または美意識以前、すべての存在以前にすでに有り、且つ有った命のたぎりの場なのである。それによってすべての個が個として現成し得、事として有り得るその根源的な命そのものなのである。したがってそれは有無を越えた絶対の有、絶対の無その事である。これがイエスが証示する「必要な一つ」「神の支配」にほかならない。

人間はいかなる意味においても「私」というものが主体ではない。私は私によって私なのではない。私がわたしの命の究極的な主体ではなく、私は私以上の命に恵まれ、祝され生かされている者なのである。神の支配のもとで人間としてその命の充実を得ることが出来るような限界を持つ者として生かされている者なのである。それ故に、自分は自分の配慮によって自分として生き

て行けるのだと思い違いをする人間の生のそこには、いかなる根拠も、生きる意義もない。その生が一見どれほど輝かしいものと思われる一生であっても、結局この世に限定された一時の幻想であり虚構の生に他ならない。人間の本当に開放された命は人間の限界の自覚、限界を限界たらしめているそこに於いて活性化する事ができるのである。滝沢克己の表言でいえば「限界点即自由」ということになる。その消息をイエスは次のように言われた。

自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたし(神の支配)のために命を失う(自分の主体性の限界を自覚する)者は、かえってそれを得るのである。

―マタイによる福音書一〇章三十八節以下―

× ×

パウロは「人間を本来的に生かす働き」を「もはや、わたしが生きるのではなく、キリストがわたしの内に生きている」という直接経験によって語った。パウロには原始教団から受け継いだ「贖罪と義認」というイエスの十字架理解がある。しかし先にも語ってきたとおり、その十字架による贖罪と義認信仰を彼は徹底することで、自分を本当に生かす働きが何なのか、何だったのか、ということに開眼した。パウロの場合それを復活のキリストの命に於いて啓示された。イエス・キリストの贖罪死と復活を単に客観的な出来事として、「だから」罪が赦されたという教条

的な原理に立った解釈ではなく、その出来事が提示し証示する実存的な内容に深く開眼すること、つまり「おまえを本来的に生かす働き」「生まれる以前から、今に至り、これからも無条件に、生かさずにおかない命の働き」が「これなのだ」という直接的な開眼、その出来事が証示する大いなる命の啓示の霊的な覚醒こそが、彼の福音の内容なのである。このような自分の生の現実を彼は「わたしにとって、生きることはキリストである」と言った。ちなみに、このようなパウロの福音理解について、敬愛する織田昭氏はつぎのように語る。「『死人が復活する』という信仰が、その強い生き方のすべての源だ、という理由はどこにあるのでしょう。単純な考え方からいくと『死んでもその先に、もう一つの命がある。現世より豊かな命があるんだ』という理由づけが考えられます。……イスラムのテロリストでもやはり『死んだらその先に……』位のことは考えていたのではないか。――単に『現世の次に来世があるから』という古典的な慰めの公式とは違うもの――「『生ける神がこの私を生かしたい一心で、キリストを生かしなさったその神のお心が福音にこめられている！』この神聖な事実に触れた人が、新しい命に、強い高貴な生涯に、奮い立たされるのです」（第一コリント書の福音四〇）

× ×

イエスやパウロ、または原始使徒たちの信仰の生きざまを記した新約聖書が証示する「こと」は、人間を本来的に生かす働きは、イエスにおいては「神の支配」であり、パウロにおいては

「復活のキリスト」であり、私の表言では「命のたぎり」である。しかしそれらは、それぞれの観念が生み出した表言であって、それらは人間の思慮分別を超絶した命の働きその事をそれぞれが超越的な働き(聖霊)によって直接経験した結果の宗教的表現言語の一つにしかすぎない。この場合大切なことは言語ではなく、直接経験によって開眼したその「こと」である。それは分別では掴みどころがなく、ましてや言語表現は出来ず「絶対の無」そのことなのである。その命の前では「信ずる」とか「信じない」とかいう人間側の分別も無意味化される。この「絶対の無」の命その「こと」、その命のたぎりなるその超越的なその「こと」を西田幾太郎が「場」と表言したことは、イエスが働きとしての「天の父」を「神の支配」と提示したことと重ねてみると、極めて的確である。

×　　×

パウロはその「場」に生きることを「キリストと共に死んだなら、キリストと共に生きることにもなる」と言った。(ローマの信徒への手紙六章八節)そしてその「場」では、死も生も男も女もユダヤ人もギリシャ人も、未来も過去も、どのような伝統も、芸術も文化も哲学も科学も……一切がそれ自体では無意味化され消えて無くなるのである。スッカラカンのスッカラカン、有も、無もなく、ただ絶対の無、絶対の有だけ、「神の栄光だけ」が命していることになる。その「場」の命に生きる時、この世の一切が結局、人間の自我が生み出した幻想であり虚構に他なら

ないことに開眼されるのである。人間の本来的な生き方はここからのみ始まるのだ。「古きは過ぎ去り、見よ、新しくなりたり」である。

×　　×

人はいつも自分自身の根拠を忘れて自分自身で立とうとする。だが、そこでたとえ神仏を熱く仰ぐとも、そこから生まれる正義も善行も謙虚も自己犠牲的奉仕も信仰もすべて自我から生ずる産物である。そこには自我絶対化が働いている。聖書が言う「罪」とは生命の根を断ち切ったまま、自己絶対化するそのことである。イエスは言われた。「しかし、今『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る」と。(ヨハネによる福音書九章九節)

罪とは善行が出来ないことではない。人への平等の愛が欠けていることでもない。勇ましく伝道し、多くの献金を無理して捧げないことでもない。ボランティア活動に消極的になることでもない。それらは、個人が置かれたその場、その時に応じて出来る事を精一杯その人なりにすればよいのである。それらは人間の救いや滅びに直接関係はない。問題は、すでに及んでいる大いなる根源的命のたぎりに生かされている、その現場(神の支配)に直接触れぬままの自我によって、自分を立てようとするその自我の在り方である。

×　　×

以前にも述べたが、わたしの信仰の求道の姿勢は始めから認識論的なそれではなく存在論的、

実存的であった。その意味では私の周囲にいた大方のクリスチャン達が道徳的、倫理的、且つ規範的に聖書の教えに関わったのとは、いささか異なっていた。それは私が第二次世界大戦後世界に蔓延し、敗戦国日本にも思想的に流行した実存主義の影響を受けたことによるのかも知れない。

とにかく主観・客観の構図でものを観たり考えたりする近代的な認識論的思考ではなく。また、生き方の規範を聖書の教えに求める倫理的なそれではなく、むしろ、既成観念が示す形式的普遍性とされる本質を突破して、真実の自己を実現しようとする無限の自己超克を、人間の本来の在り方とする決断的生へ促し、自覚開眼させる働きをするものとして新約聖書に接したのである。

このような求道の途上で記した次の一文は当時の私の宗教と信仰についての考えを語っているように思う。

「人間の考えが、ある特定の時と場で固定するとき、その人間は人間として、もはや生きていないで死者となったのではないかと思う。特に宗教的生に於ける固定化は、その宗教、または信仰の命の喪失をきたらせる。常に自己の生の在り方を固定化から解放し自己自身を否定しつづけるところに宗教はその命を保ち、信仰者は真の信仰者として生きつづける事ができるのであり、同時に、そのような生へ人間をおし出して行かせるものが、真の宗教であり、信仰であると思う。」（「途上」前書きより）

×　　×

私が十八歳前後のころ当時文科系の学生の必読書のようされていた西田幾太郎の書物、例えば「善の研究」などに出会い、続いて滝澤克己の「西田哲学の根本問題」の一書で滝澤に出会ったことは以前にも記したが、その後「仏教とキリスト教」（一九五〇年）という彼の著書はわたしの求道に大きな影響を与えた。この書物は周知のとおり、西田の弟子であり、禅哲学者であると同時に禅者でもあった久松真一に対する批判対決の書でもあったのだが、ここで私自身がそれまで、それだと自覚しないままで密かに抱いていた根本的な疑義に大いなる指針を与えられたのである。

滝沢から学んだ事の大切な一つは、人の側の意識や体験、それらに基づく思想や行為に全く先行して、つまり、人がそれを知ると知るまいと、またそれを認めようと認めないとに関係なく、さらに人が特定の宗教を受け入れる以前、そして信じる、信じない以前に、人と神との関係は無条件にどの人の基にも既に原関係としてあり、その関係を「第一義の接触」つまり、師バルトに習ってインマヌエル（神我らとともにいます）と言った。そして、この第一義の接触に基づいて、その原事実が歴史内で典型的に生起したのが歴史上のイエスであって、それは決して神と人との第一義の接触ではなく、どこまでも第二義の接触にほかならない。それ故、イエスに於いて初めて人が神と接触するのではなく、それ自身は歴史内でとる神に基づく人間の相対的な形なのであると言う。この点、つまり第一義の接触と第二義の接触を混同してしまったところに問題がある

のだと、師のバルトを批判すると同時に伝統的なキリスト教を批判克服しようとした。

要するに、滝澤は、歴史的なイエスによってはじめて、神と人との接触が生起した(第一義の接触が成就した)という伝統的なキリスト教は、第二義の典型的な接触の生起の形とはいえども歴史上相対的個人であるイエスを救済の根拠となし、且つ偶像化することで、キリスト教を排他的絶対主義化してしまったという。

とにかく、滝澤は人間の一切の思いに先立って、人間の自己成立の根底に既に及んでいる「神と人との原関係」そのものと、その原関係に基づいて歴史内に成り立つ相対的な個々の形との両者の関係は不可分にして不可同であり、その順序は不可逆であり、そのように把握することがイエスの思想に相応しいという。わたしは、滝澤のイエスの信仰理解、またキリスト論に私自身の直接経験に於ける信仰理解の立場から同悟的に共感した。特に、人と神との原事実に開眼していないというだけでなく、第一義の接触と第二義の接触との混同のみならず、第二義の接触に加重に重点をおくことで現事実を見失い、歴史内のそれを絶対化することで原理主義的な倒錯化現象を伝統的なキリスト教に見ると共に、所謂「宗教一般」及び世俗の主義主張に於いて見るのである。

× ×

イエスは言われた。「父(神)は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者に

も雨を降らせてくださる」（マタイ五章四五節）。人の善悪に先んじて大いなる命は既に及んでいる。神とはまさに、「大いなる命のたぎりそのこと」である。したがって、その「こと」としての神は主観―客観の図式としての認識の対象にはならない。人の認識の向こう側に「こと」なる神は有無を越えた「絶対の無」として「全体」でもある。その意味で、大いなる命のたぎりは、天地宇宙にたぎり躍動しているのだ。その命のたぎりの波動は天地に形化して輝いている。しかし、その形は決して大いなる命そのものではなく、ただの形（あらわれ）にしかすぎない。その意味でそれらは滝澤が言う第二義の接触の一つの出来事にしかすぎないだろう。だからイエスは「空の鳥をよく見なさい」「野の花を注意して見なさい」と言われた。それは、そこに躍動する「命のたぎり」そのことを直接経験せよ、という悟りへの促しである。しかし人は「見ても見ず。聞いても聞かず」とイエスは嘆息される。だが、人が自我を滅し、世俗的な認識を超えるとき、命のたぎりが命のたぎりに開眼させてくれるのである。まさに直接経験によって、目前に命している大空を飛翔する鳥、光と風と水と土に育まれている野の花の出来事のそこに、大いなる命のたぎりの凝縮した「創造に於ける自然」そのこと（インマヌエルの原事実）に全身で開眼するのである。そこでは、鳥も花も空も水も土も風も自分も消えて無くなり、全てがそのままで命のたぎりとなる。それは滝澤が言う限界点即自由の世界であり、絶対受動の世界である。

×　　×

滝澤と共に私が共感を覚えたのは八木誠一である。滝澤はキリスト教に基づく宗教哲学者、八木は本来は新約聖書学者である。

一方、私は一介のキリスト者・求道者であり、およそ「学者」とは無縁である。私が彼らに共感を覚えるのは彼らの直接経験の世界が私自身の直接経験の世界と極めて近く、そこで開眼させられたことの類似性による。しかし、私は滝澤や八木に補囚されているのではない。同じような直接経験の場から発語していると思われる誰にも共感を覚える。例えば鈴木大拙や道元や臨済や無門や久松真一等の禅者、またユングやシュタイナーやクリシュナムルティ、エックルハルト、空海等々にも。とは言え、八木からは新約聖書学に関わる研究成果を書物の上で多く学ばせてもらった。特に歴史的なイエスと宣教のキリストの区別についての現代新約聖書学の整理と批判と提示について学んだところは大きい。私が八木に共感と関心を持ったのは八木の例のドイツ留学中に「カッセル近くの列車内での廓然無聖経験」と私の「教会二階に於けるヒマラヤシーザー及びその他の経験」との類似性である。これについては既に述べたが、それらに共通することは自己成立の根底に厳存する原事実への開眼ということである。それは観念化以前の原事実への直接経験である。八木はそれを人格を統合する超越者とは何かという探究から、新約聖書の思想との一致を統合論で探り、同時に仏教との関わりをも明らかにしていった。

彼が言う統合とは、すべての物事は磁石の極のように相互が別々でありながら同時に相互性に

よってそれ自身でありうる在り方の事である。例えば、「あなた」と「わたし」とは別々の者でありながら、同時に「あなた」があっての「わたし」でありうるようにある必然といえよう。彼はそれを「相互否定的媒介」と言う。私が「創造に於ける自然」ということと同じである。八木はその統合の規定を「キリスト」と理解する。そこでは「『あなた』即『わたし』」いうことであり、このような統合の場に於いてこそ、人間は本来的な在り方が出来ると言う。そしてそのような統合の場を成立へ促す命こそ超越者(神)だと言う。私が「命のたぎり」と呼んできたことであり、そして統合を成就させる働きこそ聖霊にほかならない。八木はその様態を「私たちが互いに愛し合うならば、神は私たちの内にいます」というヨハネ書簡の言葉に見る。このような様態を私は「統合動体」と呼んでいる。

×　　×

この「問い続けてきたこと」の最終号に於いて、私が関心を持ちつづけ、共感と示唆を得た滝澤と八木の信仰理解の一部を粗雑に述べてしまったが、彼らに私が関心を持った今一つの事は、現に聖書の福音を宣る一人として八木が次のように語ることへの共感同感によるのである。「聖書のみを神認識の根拠としたとき、現代人の現実経験と神認識の結びつきが切断されてしまった。したがって滝澤と八木の主張は私たちの現実経験・現実認識を結び合わせるという意味を持つのである。両者がこう主張するについては、両者の仏教との出会いが大きい意味を持っている。こ

うして両者は、キリスト教会の外には神認識があるはずであり、現にあり、しかし必ずしも正しい仕方で成り立ってはいない事実を認め、現代に於いて神認識がどこで、どのようにして成り立つかを明らかにしようとする。正しい神認識を欠くとき、人生も文化も頽落するからである……滝澤も八木もけっして、聖書はもはや無意味だと言っているのではない。聖書は神を指示し、証言するものであり、不可欠の導師である。しかしそれは神認識のための唯一絶対の根拠ではない。キリスト教会の外の神認識を一切誤謬だと断定する権威はない。このように考えるときかえって聖書の本質が明らかになるのだ。それゆえ聖書は何を語っているのかという問題は、依然として滝沢と八木との中心的関心事だと言ってもよいだろう。」（「神はどこで見出されるか」）

松下　昌義
1931年生まれ
左京キリスト教会牧師

みちしるべ文庫　３０
わたしの問い続けてきたこと（下Ⅱ）
－わたしの信仰－
２００２年６月１６日発行

著　者　松下　昌義
発行所　左京キリスト教会
京都市左京区下鴨南茶ノ木町２９
印刷所　片桐軽印刷（有）